群教セ	G01 － 04
	平26.254集
	国語－高

国語総合の小説分野における読解力を高める指導の工夫

――双方向の交流を意識させた「学び合い」を取り入れて――

特別研修員　北爪　紀枝

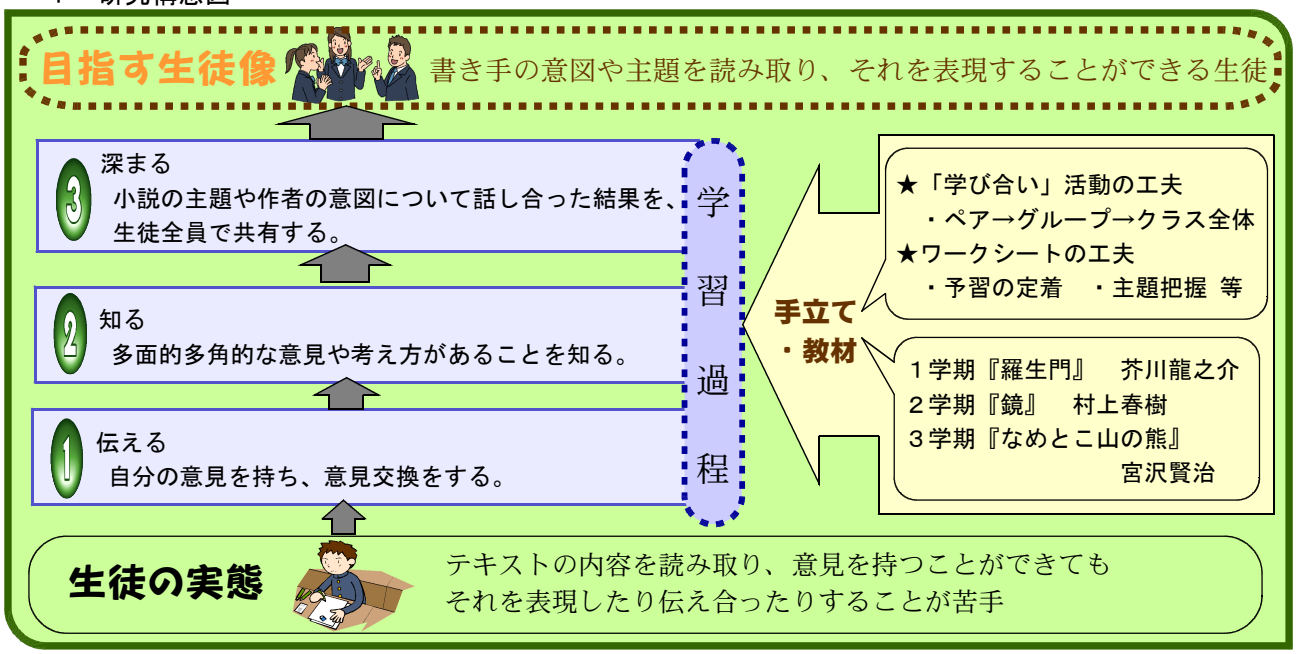
Ⅰ　研究テーマ設定の理由

国立教育政策研究所元総括研究官の有元秀文氏は、育成が叫ばれて久しいPISA型読解力をはじめとする国際社会における読解力を「①正確に読んで　②読んだことを根拠にして　③自分の意見を表現する」力であると述べている。本校生徒を見ると、概ね真面目に授業に取り組むので、テキストの内容を読み取り意見を持つことはできる。しかし、それを表現し合うことに苦手意識を持つ者が多い現状が認められる。

そこで、国語総合における小説を題材とした授業において、読解力を育成するために、双方向の交流を意識した「学び合い」活動を手立てとすることとした。これにより、現行の学習指導要領や「平成26年度県立学校教育指導の重点」で求められる言語活動の充実も期待できると考える。まずは内容を正確に読み取る、次にそれを根拠として構築した各自の意見を交流する「学び合い」活動を行う、そして多面的多角的な検討を経た意見を再構築するという過程を踏むことにより、表現することまでを含み込んだ読解力が育成できると考え、本主題を設定した。

Ⅱ　研究内容

１　研究構想図



２　授業改善に向けた手立て

(1) 実践１における研究上の手立て

小説『羅生門』を題材に、主題理解を深めながら読解力を高めることを目的とする。まずは、予習プリントを活用し、生徒個々の知識を増やし主体的に取り組む姿勢を引き出す。その姿勢を基に、個人の意見をもたせて、ペアで双方向に交流する「学び合い」活動（以下「学び合い」）を実践した。

実践１における研究上の手立て

○　予習プリントによる主体的態度の涵養
・予習を徹底することで、学習への主体的態度を引き出す。ワークシートを工夫し、読解段階で書き手の意図を捉えやすくする視点を明示し、それを基に考えさせる。
○　ペアワークの「学び合い」による双方向の交流
・個人の考えをペアで交流させることにより､内容理解を深め自分の意見を筋道立てて構築させる。

予習項目を授業で確認しながら進めることで、生徒のより主体的な取組が認められた。一方、「学び合い」では期待したほどの積極性は見られず、そうした活動に不慣れな様子もうかがえた。そこで、実践２では、考える力を高めるための「**適切な発問**」、自分の意見をまとめるための「**語彙力の向上**」、相手とスムーズに意見を交換するための「**話しやすい雰囲気作り**」に留意することとした。

⑵ 実践２における研究上の手立て

小説『鏡』を題材に、実践１の反省を踏まえた手立てを考えた。主題理解の深まりを目指してワークシートの構成を工夫するとともに、「学び合い」の形態にグループ活動を導入し、話しやすい雰囲気作りに留意した。これにより、多面的多角的な意見や考え方に触れることができるようにした。

実践２における研究上の手立て

○　ワークシートに主題把握のための選択肢を提示
・選択肢を読むことで多面的多角的に考えるための指標とさせながら､自分の考えを相対化させる。
○　グループワークの「学び合い」による双方向の交流
・個人の考えを多人数で交流させ、内容理解を深め自分の意見を筋道立てて構築させる。

活動を重ねることで、生徒たちは「学び合い」に慣れてきている。ペアよりもグループの方が話合いが活発になったり、複数の生徒と意見を交換することで自分の意見に自信を持ったりしている様子もうかがえた。一方で、小説における主題を考える場面よりも、文中の表現に対する作者の意図を考える場面の方が「学び合い」での意見交換は活発であった。

Ⅲ　研究のまとめ

１　成果

○　予習や授業時に活用するワークシート等を工夫することは、生徒の語彙力や知識力を高めたり、各自が意見を持ったりすることに有効であった。
○　「学び合い」は、各自の意見を表現したりそれらを深め合ったりする力を高めることにつながり、読解力の向上に有効であった。「学び合う」ことで、生徒の授業態度はより主体的なものになった。

２　課題

○　より効果的な「学び合い」に向け、ワークシートを工夫したり、クラスの雰囲気づくりへの配慮をしたりする必要がある。
○　授業のどの場面において「学び合い」を設定することが読解力の向上に向けて有効であるかという見通しを持った授業計画を立てる必要性がある。

３　提言

○　自分の意見を『伝え』、自分以外の意見の存在を『知り』、自分の意見を修正し、『深める』ことができる「学び合い」は、読解力の向上につながる。
○　予習プリント、ワークシート、発問の仕方だけでなく、「話しやすい雰囲気」を作っていくことも、「学び合い」の活性化や成果の多寡に大きく影響を与える。

＜授業実践＞

実践１

１　**単元名**　小説（１）「羅生門」『精選　国語総合』（大修館書店）

２　**本単元及び本時について**

「羅生門」は、小説として見事に構築された作品であり、作者が細部に至るまで注意深く目を配り、表現に意を払っている。高校に入学して初めて学習する小説としてふさわしいと考える。映画化され世界的にもその名は有名であるが、大正４年に発表された本作品は、現代の高校生からすると、時代背景や当時の文化とともに、文中の表現等、多くが理解しがたく、分かりにくいと感じてしまうことが懸念される。しかし、内容を丁寧に追って授業を進めるだけでは、単なるあらすじの確認で終わってしまう危険もある。登場人物の言動から心理を読み取り、人間の在り方、価値観を含めて「羅生門」の全体像に迫ることが重要なのであり、それが、小説の主題を読み取る学習に対する姿勢につながっていくと考える。

本時は全６時間計画の６時間目である。主人公の言動の背後にある考え方を読み取ったり人間の生き方について考えたりしながら、読解力の向上を図る。

３　**授業の実際**

予習プリントで漢字練習をし、「羅生門」に関する知識及び難解語句の意味を調べた上で授業に臨ませた。意味調べについては、指定語句以外にも各自の視点で語句を選ぶよう指示した。その際、対義語の確認や、調べた語句の説明文中の語句を調べることを推奨した。これにより、生徒が興味･関心を持って主体的に予習に取り組み、語彙力が向上することを目指した。予想外だったのは、初読後に主題を考えさせた（「人間とは『　　』である」の『　　』を埋めなさい」）ところ、ほとんどの生徒が大きくそれずに読み取れていたことである。そこで、単元のまとめとして主題を考えるワークシートⅣ（図１）に、初読後に読み取った主題と違いはあったかを確認する項目を設けることにした。

【学習課題】下人がとった行動の背後にある考え方を読み取り、人間の生き方について考える。

◇学習活動１（各自で考える）

ワークシートⅠ～Ⅲを見直しながら、下人の心情の変化と、最終的に芽生えた「勇気」を確認した。その後、ワークシートⅣ（図１）を用いて、「勇気」の具体的な内容（それまで下人が否定していた「盗人になることを肯定する『勇気』」）を導き出させた。

◇学習活動２（ペアによる「学び合い」）

下人がこれまで否定してきたことをどうやって肯定するのかについて、ペアによる「学び合い」で

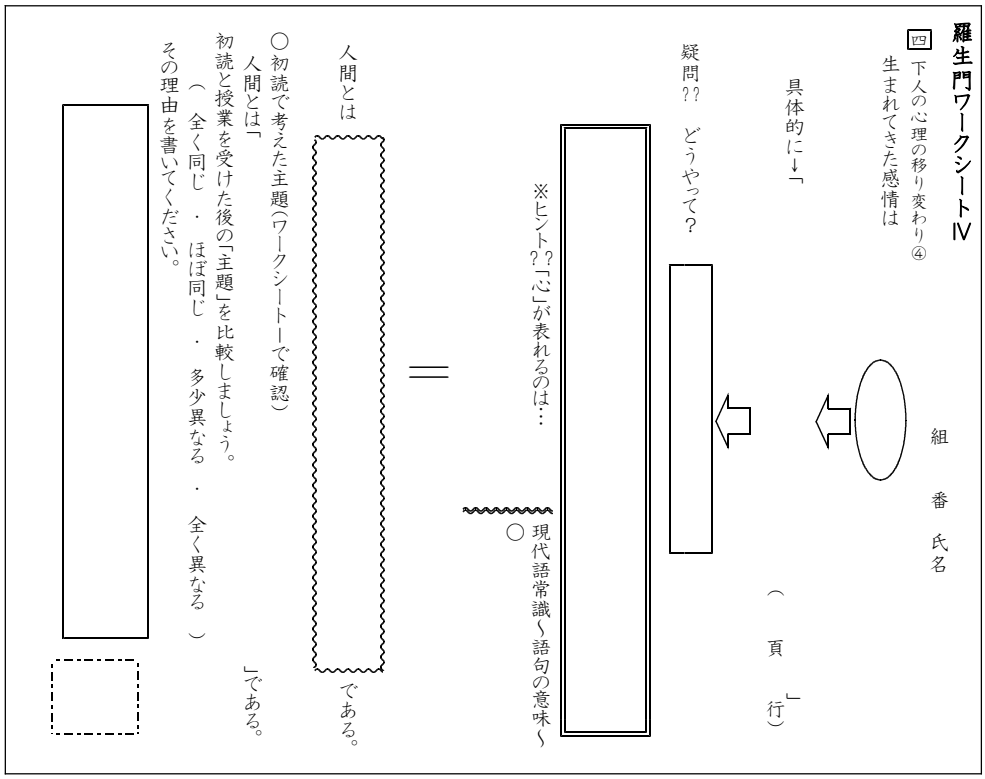


図１　ワークシートⅣ

話し合わせた。その際、「声」には人物の心情が表れる点を確認し、下人が老婆に対して「『あざける』声」で話しかけていることに注目させた。指導者が期待していた「老婆の考えを逆用する」という視点に近い考えが話し合われていた二つのペアの代表者に、ホワイドボードへの板書を指示し、クラス全体で答えを共有した。

◇学習活動３（各自で考える）

これまでの学習活動を経て、ここで改めて「羅生門」の主題について考えるように話し、ワークシートⅣに記入させた。併せて、ワークシートⅠに記入した初読後の自分の考えから変化はあったか、それはなぜかについても確認するように指示をした。

図２　ペアによる「学び合い」

４　考察

表１は、生徒３名の「初読後と授業後の主題把握の変化」である。前述のとおり、初読後は大きくそれずに主題を読み取れていたものの、その考えは画一的で浅さが見られる。その後、ワークシートや「学び合い」に取り組んだ結果、主題把握の表現に、「正当化」（生徒Ａ）、「生きるためには」（生徒Ｂ）、「他も利用」（生徒Ｃ）等、読み取った内容の深まりがうかがわれる記述が加わっており、読解力の向上が認められる。一方で、「変わった理由」の意見にはまだ画一的な部分が見られ、ワークシートの構成や指導者の発問の仕方に工夫の必要を感じた。意見に広がりや深まりを持たせることが、今後の課題である。

実践１から、語彙力の向上や読解力の深まりを目指して、構成や発問を工夫したワークシートを作成すること、さらに、「学び合い」に取り組みやすくするための雰囲気づくりが重要であることが分かった。そこで、実践２に向けて、前者については、生徒が多くの選択肢の中から自分の考えを選ぶワークシートを準備することにした。自分が思いもつかないような選択肢を並べられることで、自分の読みを相対化し、発展的な思考を促すためには有効だと考えたからである。後者への対応については、授業の導入部分の活動や授業者の話の内容、また、生徒たちの席順や「学び合い」の形態などにも配慮する必要があると考えた。そして、小説分野においてだけではなく、他分野でも「学び合い」を積極的に取り入れることにした。

表１　初読後と授業後とで捉えた主題の変化とその理由について（ワークシートⅣ）

	初読後	授業後	変わった理由
A	自分のためなら悪事も働く生き物	**人に流されやすく、悪いことをしていても理由をつけて正当化ようとするもの**	悪事を働くその前に、悪い事をすると分かっていながら、これをするのはこういう理由があるから仕方がないんだ。と無理やり正当化し、人の話をきけばやっぱりこうかもしれないと思ってしまうのではないかと考えたから。
B	自分勝手	**生きるためには手段を選ばない無力なもの**	生きるためには手段を選ばないということは、自分勝手なことと少しにているように思うからです。
C	自分の為ならばなんでもしてしまうもの	**自分が“正しい”とするために他も利用する**	この話をふかく読んで、やっぱり人間は私欲にまみれているんだなと思ったからです。

「学び合い」の効果を確認するために、「初読と授業を受けた後の『主題』の違い」についてのアンケート調査を行った。結果は、「全く同じ」2.4%、「ほぼ同じ」47.6%、「多少異なる」45.1%、「全く異なる」4.9%で、授業を通じて９割以上の生徒に、主題に対する自分の考えに変化が生じたことが分かる。本単元では、「学び合い」を多く取り入れたので、ペアによる「学び合い」やそこでまとめた意見を全体で共有することが、主題把握の広がりや深まりにつながったと言える。

実践２

１　**単元名**　小説（２）「鏡」『精選　国語総合』（大修館書店）

２　**本単元及び本時について**

「鏡」は、「怪談」仕立ての自己体験談で、高校１年生には親しみやすい内容である。読者に直接語りかけているような一人語りの形式や、平易な用語、生徒たちに比較的近い主人公の（体験談における）年齢設定も、本小説の世界に感情移入しやすい要因であると考える。実践１で学習した芥川龍之介の「羅生門」（大正４年発表）よりも取り組みやすい内容と言えよう。一方で、本作品の「怪談」性にばかり注目してしまうと、作品のリアリティという点に関連して読み解く興味をそがれてしまう生徒が出る懸念もある。そのため、作者がリアリティを出すためにとった表現技法に気付かせることも重要となってくる。また、本小説の構成や内容と「羅生門」におけるそれとの比較を通じて、小説の虚構の面白さをより深く理解することも期待できるとも考えている。本時は全４時間計画の４時間目であり、本小説の主題について考えることがねらいである。

３　**授業の実際**

小説だけでなく、国語総合で扱う全単元を通じて「学び合い」に取り組ませているため、取り組む様子は活発になってきている。その反面、話し合われている内容や表現には稚拙な面や画一的な傾向が強い。

そこで、本単元では、広い視野を身に付け発展的な思考を促すことを目指した。主題を読み取る際、あらかじめ視点の異なる多面的多角的に設定した選択肢を用意したワークシートⅣ（図３）に取り組ませることにした。同時に、「学び合い」の形態については、隣同士の「ペア」を基に、人数を増やした「グループ」活動にも取り組むことにした。また、自分たちの学習活動の目的を知り、「学び合い」により積極的に参加できるように、ワークシートⅠの冒頭に本単元の目標「読解力（表現力を含む）を高めよう！」を記載した。これにより、授業を通して何を身に付けるのかを明確に意識させた。

【学習課題】この家に「鏡」が一枚もないことにどのような意味があるのかを考え、主題に迫る。

◇学習活動１（各自で考える）

第三段落を踏まえて、ワークシートⅣで、主人公が自分の体験を通して語った感想から、主題と密接に関わる一文（「人間にとって、自分自身以上に怖いものがこの世にあるだろうか」）を本文から抜き出し記入するよう指示した。併せて、選んだ理由として根拠も記入させた。

◇学習活動２（各自で考える→グループによる「学び合い」）

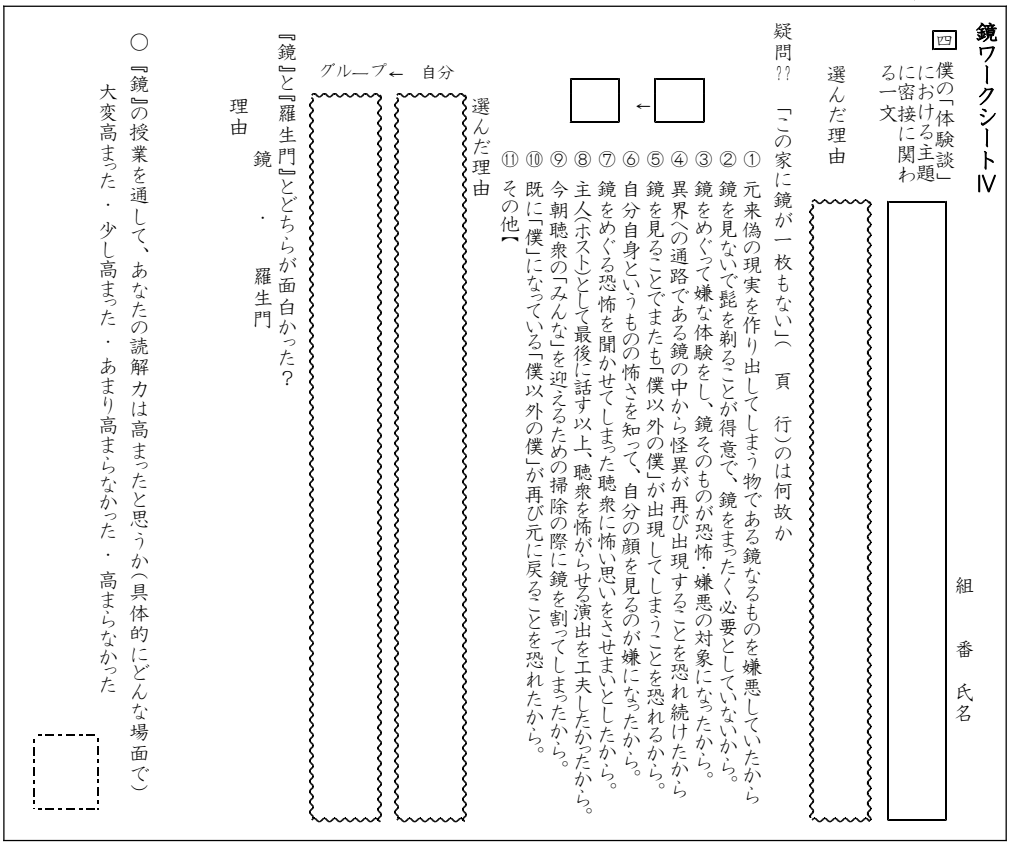


図３　選択肢を提示したワークシートⅣ

本単元のタイトルは「鏡」であるのに、主人公の家には鏡が一枚もない。主題と関わるこの内容をどう考えるか、ワークシートの選択肢の中から、各自で一つ選び、その理由を考えさせた。その上で、四名編制のＡ～Ｇの７グループに分かれ、話し合って一つにまとめ（図４）、結果をホワイトボードに書き、全体に向けて提示させた。結果として、全グループが選択肢「⑤　鏡を見ることでまたも『僕以外の僕』が出現してしまうことを恐れるから」を選んだ。各グループが⑤を選んだ理由は表２のとおりである。

図４　グループによる「学び合い」

多くのグループが、第３段落の体験談における主人公の心情が「恐怖」であることに着目して理由をまとめている。これは、ワークシートの最初の問いを強く意識してのことと考えられる。更に、この心情を踏まえて、「鏡を置かない」理由を「自分自身を見ることも恐くなった」（B）、「同じ状況を作らないようにした」（C）等、より深まった説明が加えられており、生徒たちの読解力が高まっていることを感じた。

４　考察

授業後のアンケート「『鏡』の授業を通して、あなたの読解力は高まったと思うか」に対する回答は、「大変高まった」21.8%、「少し高まった」75.6%、「あまり高まらなかった」2.6%であった。９割以上の生徒が多少なりとも読解力が高まったと感じている。どんな場面で高まったのかという質問には、「ペアワークをした上で」、「仲間の意見を聞くことで」等、多くの生徒が「学び合い」の場面が有効であったと答えている（表３）。意見交換も人数を増やしたことによって活発になり、多くの考えを一つ意見にまとめることが表現力向上にもつながったと考える。

表２　選択肢⑤を選んだ理由

A	鏡を見ると、以前に体験したことを思い出して、また同じことがおこってしまうのではないかという恐怖をいだいているのではないかと思ったから。
B	僕以外の僕に支配されそうになったことが心の底から怖かったので、自分自身を見ることも怖くなったから。
C	また出現したら支配されるかもという恐怖から、同じ状況を作らないようにしたため。
D	一度だけ心の底から怖いと思った体験だったので、再び鏡を見て、奴に出会うのが嫌だったから。
E	鏡さえなければ、僕以外の僕が現れることはないから。
F	「僕以外の僕」が恐怖の対象であり、敵対する存在だから。
G	僕以外の僕はそうあるべきではない形の僕なので、見るのが怖いから。

また、ワークシートにあらかじめ用意した選択肢に対して「⑧番の答えも面白い」と書いた生徒がいた。このことは、選択肢の提示が、多面的多角的な考えがあることを知り、個人の考えをより深める手立てとしての有効性を示していると考える。

表３　読解力の高まり（ワークシートⅣにおける生徒の感想から）

『鏡』の授業を通して、具体的にどんな場面であなたの読解力は高まったと思うか。
○今までは自分の意見を他の人と共有することがあまりできなかったが、ペアワークをした上で自分の意見がしっかりと持てるようになった。 ○「家に鏡が一枚もない」という最後の場面は人によって様々な考えがあって視点を変えてみることができ、模範的な答えは一つだけど、いろいろな作品の見方をすることができたから。 ○話合いの時に、今まで表現したいことに合う言葉を見付けることができない事が多かったが、それが少なくなった。 ○話合いが多かったので、自分の意見がまとまらなくても、仲間の意見を聞くことで新たな考え方ができるようになったと思うから。 ○友達と考えを話していく中で、自分にはなかった考えを知ったり、さらに深く考えることができたので読解力が高まったと思います。また、友達と自分の考えをまとめることで表現力も高まったと思いました。 ○最後のまとめの部分で、考えが周りと一致したときと⑧番の考えも面白いなぁと感じられたとき。